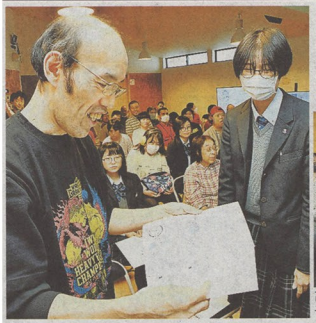
悔しいも喜びも やさしく描く贈り物

大商大高生 知的障害者の半生冊子に

絵や絵文字を駆使 「より伝わる」にこだわり



高校生たちは創恩苑を訪れ、作った冊子を贈った＝東大阪市中新開2丁目

美術やデザインを学ぶ高校生たちが、知的障害者が語った半生を冊子にまとめることに取り組んだ。つらかったことや、うれしかったこと。明かされた様々な思いを、絵や絵文字を用い、漢字にルビをふるなどして、なるべくわかりやすくなるよう工夫した。冊子を受け取った側からは、喜びの声が上がる。

冊子を作ったのは大阪商業大高校（東大阪市）のデザイン美術コースで学ぶ3年生19人。同じ市内にある社会福祉法人「創恩苑」の施設で暮らしたり、事業所で働いたりしている人たちのことを描いた。

高校生たちは6日に創恩苑を訪れ、「こんなに人のことを考えたのは初めて。喜んでくれたらうれしい」などと冊子を渡した。

冊子は1人につき4ページ。「きれいに描いてくれてありがとう！」「小さいころを思い出します。」渡した高校生たちには、そんな言葉がかけられた。

高校生1人、高佐茉希さんは、野々口文彦さん（51）の半生を冊子にした。

野々口さんが障害を理由に学校でいじめられたこと、グループホームで暮らし、仕事をするなかで友人ができ、いまは家庭を持つ目標があることなどを記した。高佐さんは「野々口さんは夢があって、めっちゃ応援したいと思った。どうやったらわかってもらえるか試行錯誤した」と話す。

冊子を見た野々口さんは「顔や目の特徴などうまく描いてくれて、よく見てくれていると思った。大事にしたい」。高佐さんは「喜んでもらえて、作ってよかったと喜んだ」。

創恩苑の林淑美理事長は「みんなこれまでいろいろな思いをしてきた。それが本になり、それぞれの宝物になったと思う」と語る。

教諭「人権深く考える機に」

創恩苑では事業の一つとして、インターネット放送局を運営している。知的障害者のことについて当事者たちが自ら発信し、世の中の人たちに色々なことをもっと知ってもらいたいという思いからだ。

こうした取り組みの一環として、差別やいじめを受けて悔しかった経験、いま抱いている夢や喜びなどを語る企画「私の歴史」を制作し、発信している。

今回の高校生たちが学ぶデザイン美術コースで美術を担当する久語・民雄教諭は、授業で人権について考える機会にと、様々なテーマを扱っている。それらはナチスドイツによるホロコースト（ユダヤ人大虐殺）や、広島と長崎に落とされた原爆、優生思想や出生前診断など多岐にわたる。

創恩苑については、久語教諭はテレビ番組で知った。それをきっかけに、生徒が障害者と交流し、本を作れないかと思い、創恩苑に相談。こうしたなかで、生徒が「私の歴史」を見て、語られた半生を本にすることで、人権についてより深く考えるようになるのではと考えた。創恩苑からの理解も得た。

冊子作りには「LLブック」の手法を用いた。LLは「読みやすく分かりやすい」という意味のスウェーデン語の略。絵や絵文字を用いるなどして読みやすくなるよう工夫している。

高校生たちは夏休みにLLブックについて学んだうえで、冊子制作に取り組んだ。絵の色合いや配置、文字の大きさや行間にも気を配り、絵文字も自作し、「どうすればより伝わるか」に徹底的にこだわった。

高校生たちそれぞれの個性あふれるイラストなどとともに、記されている半生。それは、家族との思い出、もどかしい思いをしながらどうしても うまくいかなかったこと、1人で過ごした孤独、仕事で相手に喜ばれたことから得られた自信や喜びと、実に様々だ。

高校生たちからは「人の気持ちを考えて本を作ることは、自分の成長にもつながった」「相手のために作品を作ることの大切さ、うれしさを感じた」「（自分たちが）普段当たり前と思っていることに困っていることを知り、とても大切な学びになった」といった感想が寄せられた。

冊子は来年1月17日から20日まで、高校のすぐそばにある大阪商業大で開かれる卒業制作展で展示される。（前田菊）

冊子を作った大阪商業大高校の生徒たち

大阪商業大高校の生徒たちが作った冊子＝いずれも東大阪市御厨栄町4丁目